吉祥果

円頓寺だより

令和５年
７　月　号
【吉祥果 393 号】

悪の中の大悪は我が身にその苦を受くるのみならず、子と孫と末七代までもかかり候けるなり。善の中の大善も又々かくの如し。目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は我が身仏に成るのみならず、父母仏に成り給う。上七代下七代、上無量生、下無量生の父母たち、存外に仏に成り給う。乃至、子息、夫妻、所従、檀那、無量の衆生、三悪道を離るるのみならず、皆初住妙覚の仏と成りぬ。故に法華経の第三に曰く「願くは此の功徳を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」

＜日蓮聖人のお言葉＞

「盂蘭盆御書」

《意味》生前中の大悪は、生きながらその罰を受けるのみならず、子や孫七代までも降り掛かる。大善も同じで、法華経を信じた目連尊者の大善は両親までも成仏させた。法華経を信じることで先祖も子孫も仏に成れるという。法華経の精神は悉皆成仏の教え。縁ある全ての人々を成仏に導きます。有り難い法華経との縁を、くださった先祖様に感謝ですね。

お盆の飾付一例

精霊棚（仏壇）にお盆の飾りつけをし、最初はお水をお供えします。キュウリで作った馬と、ナスで作った牛は、ご先祖様の乗り物です。
13 日の夕方に迎え火を焚き、ご先祖様はキュウリの馬に乗って急いで会いに来ます。その日の夕食から、三食と二回のおやつを供えしてご先祖様を接待し、15 日の夕方に送り火を焚き、ご先祖様はナスの牛で名残惜しみながらお帰りになります。供物の一部を川に流す精霊流しをしたり、今はお寺（精霊送りの時）に収め、先祖供養をします。

〒451-0042
名古屋市西区那古野１－１１－７
長久山　円頓寺
Tel　０５２（５５１）３７６８
Fax　０５２（５５１）３７６９
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://endonji.web.fc2.com/
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　shiota.houyuu@gmail.com
長久山円頓寺　検索
【E-mail はﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞを経由しても送れます】

【銀行振込】三菱 UFJ 銀行　名古屋駅前支店
店番号 221 総合 口座番号 1381434　（宗）円頓寺
【郵貯振込】12170　3765501

先祖に感謝！
先祖に合掌！
塔婆を立てて
先祖供養を
しましょう。

お盆の季節を迎えます。今年のお盆施餓鬼はコロナ前の法要形態に戻り、制限なくお参りいただけるようになりました。当日来ていただいても、後日塔婆を受取でも、それぞれの判断にお任せします。ただ、体調不良の方はご遠慮いただいたり、感染不安の方はマスクを着用して参拝いただいたり、自分にできる範囲での協力をお願いします。

コロナ禍で参拝が少ない今だからできることは何かということで、円頓寺内外で気になるところをチェックしました。

第一弾の女性トイレ洋式化から始まり、昨年暮れから春のお彼岸中には墓地の改装工事を行いました。

お寺の歴代聖人のお墓をまとめ、合祀の供養塔も移設しました。こちらの供養塔にはたくさんの方がお参りになっており、お花が絶えず新しいものなっています。ある方が母の命日にお参りすると、いつも誰か先にお参りになっていて、私の持ってきたお花は手水桶に入れているという方がおいでだったので、三組のお花立を設置し、階段を上らなくてもお供えできるようにしました。また墓誌が三枚重なっていたのを重ならないように設置し直し、それぞれの墓誌前でお参りできるように幅を広くしました。お参りの皆さんにお墓がきれいになったと喜んでいただいております。

そして五月中に境内地の敷石を滑りにくい加工をしました。長年の檀信徒さんのお参りで敷石も凹凸がなくピカピカになっていますが、雨が降ると滑りやすく、万が一にも転倒事故が起きないようにとの工事です。現在の敷石に何とも言えない情緒を感じます。というのもお寺創建当時に敷いた石の状態に戻ったんだと思うと、遥か三百五十年の昔にタイムスリップした気持ちになります。お盆の行事に参拝の折には「三百五十年前の景色はこんなふうだったのかな。ご先祖様も同じ風景をご覧になったのかな」と思いながら境内を眺めてみてください。先祖様を思う、これもまた供養の一端だと信じています。コロナ禍もひとまず落ち着き、整備されたお寺とお墓の参りにお出かけください。

さて墓地整備もあって、お墓に行く機会が増え、お墓に出かけたある雨の日、あまり顔を合わせたことのない方が、毎月のお参りに行くお宅のお墓をお参りなさっていました。次の日はちょうどそのお宅の法事。声をかけると施主の妹さんでした。参列者に遠方から一人で来る弟さんがいます。明日の法事が終わってお墓にお参りに来ることになっているけれど、弟が手ぶらでそのままお参りできるように花をお供えに来たというのです。雨なのにタオルでお墓を拭き、花の水を入れ替え、水をお供えし、線香、ろうそくに火をつけて、お参りしてお帰りになりました。両親や先祖を思い、兄弟を思いお参りされている姿に、すがすがしさを覚えました。

〈日朗身代わりの弁〉三十五

大聖人様は刑場に到着されました。青竹をめぐらす十間四面に北条家の紋を染め抜いた幕が張られ、荒砂の上には荒筵が敷かれ、役人は大聖人をその上に降ろしました。平左衛門尉頼綱が検視の役として正面に座し、太刀取りは依智三郎直重、タスキ掛けにて待っております。いよいよ刑の執行か。大上段に振り上げた一刹那、大聖人様は

「我此土安穏　天人常充満・・・」

泰然自若と読経の声。この様子を見ていた日朗上人。

「しばらくお待ちを。私は日蓮の弟子日朗と申すもの。最後のお別れをさせてはいただけませんか！」

依智三郎は、

「さもあらん。苦しゅうない、入られよ」

日朗上人、矢来に入られ、

「師匠日蓮は世上の罪科があるわけではございません。ただただ妙法蓮華経にて天下太平を願う大慈大悲の僧侶でございます。どうか師匠をお助けください。代わりこの日朗が頚をはねていただいて結構です」

「ならぬわ」

「身代わりがかなわぬことならば、師匠とともに頚をおはねください。師匠の唱える念仏無間と弟子の唱える念仏無間といかに違いますか。どうか同罪に」

「ならぬ、ならぬ。邪魔をするな」

と足蹴にし、日朗上人を縄でぐるぐる巻きに。

「邪魔者が入った。いざ打たん」

とそこに四条金吾頼基。矢来の外より

「しばらくお待ちください。日蓮が第一の信者、四条金吾、最後のお別れがしたい」

大聖人とともに刑場まで来た四条殿は、

「法華経の現世安穏の経文が空言でなければお釈迦様のご守護があるはず。さもなくは私もここで切腹し大聖人のお供をいたそうと決意でおります」

と。刑執行を待つ大聖人は、落ち着いた口調にて

「弟子檀信徒方々、日蓮が日頃の教化をお忘れになったか。日蓮、建長五年四月二十八日、南無妙法蓮華経と唱えたその日より、杖でもって打たれ、刃の下に座らされることは覚悟のこと。我が頭を法華経のために捧げることは、砂を黄金にかえ、石を玉にかえるほど価値あること。日蓮はじめ弟子檀那が迫害に会うのは法華経が広まる吉兆。哀れなのは今の日本国の万人。我らをみて嘲笑う者は、昨日は人の上、今日は我が身と思われよ。今は日蓮も弟子檀那も日影の霜露、命もままならぬ状況。しかし必ず仏果が報いられて仏の寂光浄土に居住し、自受法楽もかなうであろう。嘲笑っておる者たちはどれほどうらやむことか。どうかそれまで、退転せぬよう」。

と弟子檀那に言って聞かされ、覚悟を決めて

「直重殿、夜も明ければ見苦しい。早や頚打ちなされ」

と刑の執行を催促なさいました。